

弘道新說

特43

659

非賣品
遞信省認可

東府坂

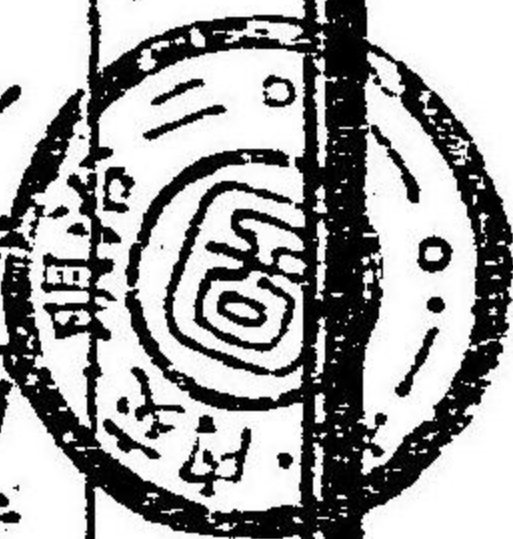
東府坂

弘道新説緒言

子ハ修身ノ要語ヲ録スル者ニシテ分テ三項ト
 一項ハ教育ノ主旨品行ノ方法徳義ノ妙用ヲ論
 二項ヲ善行襍話トス古人ノ嘉績善行ヲ掲ケ人
 模範トス第三項ヲ詩文雜評トス古今詩文ノ風
 關スル者ヲ評シ人心ノ方向ヲ定メ兼テ詩文ノ

章法句法ヲ示ス

一此冊有志ノ義金ヲ以テ成リ大成會員ニ配付スル者
 トス會員ノ其知音ニ贈與スル自由タルベシ
 一會員外ノ人ニシテ此冊ヲ得ント欲スル者ハ坂府東



區淡路町一丁目泊園書院高麗橋詰町學半書院西區
南堀江上通五丁目藻德舎ニ投書シテ之ヲ求ムベシ
遠隔ノ地ハ郵費其自辨ヲ要ス

弘道新說

藤澤 南岳述

夫婦ノ交際ハ親愛ト義務ト、二ノ者相待テ以テ成ルナリ、
親愛ハ情ニ本ヅキ、義務ハ道ニ本ヅク、要ヲ掲ゲテ之ヲ言
ヘハ、禮敬ノ二字ニシテ、其詳細ハ、婚義ヨリ以上禮典ニ散
見セリ、故ニ古ヘハ匹夫匹婦ノ愚モ、能ク知リ能ク行フト
云ヘリ、教ヘノ行ハレサル久シクシテ、今人ハ道ヲ知ラズ、
唯情ニノミヨレリ、故ニ或ハ親シミノ厚キヨリ、狎レテ相
輕ンズルアリ、或ハ愛ノ薄キヨリ、恨ミテ相戾ルアリ、夫レ

情ハ時々變動、一定セザルナリ、愛憎ノ變ハ、韓非ナドノ恐
ル、所ナリ、况ンヤ婦道ヲ失ナヒ、驕慢ニシテ憎ヲ招キ、不
義ノ行アリテ、怒ヲ招クナヤ、其夫タル者モ、能ク前後ヲ顧
ミテ知ルベシ、若シ其妻タル者、他人ト親シミ狎ル、ノ状
ヲ見ハ、其心ニ之ヲ悦ブヤ、若シ他邦人種ノ子ヲ生ムアラ
ハ、其心ニ之ヲ悦ブヤ、否ヤ、果シテ之ヲ悦ハズンバ、何ソ豫
メ其弊ノ生セザル所ニ注意シテ製ヲ立テサルヤ、之ヲ制
セント欲セハ、必ス禮敬ヲ以テ相接シ、内外ノ別ヲ正シク
ス可シ、然ラスシテ夫ハ夫タルノ道ヲ失ヒ、婦ハ婦タラザ
ルハ、皆道ヲ學ハザルノ罪ナリ、然リト雖、凡學ハ易事ニ非

ズ、宜シク終身心ヲ此ニ專ニスベシ、

學ハ固ヨリ難シ、然シテ見識ヲ立ツル亦難シ、學ト識ト両
立スベシ、今ヤ世人ノ識ナキ亦甚シキヲ覺フ、余頃日米國
學士ドクトルシモンズノ日本社會論ヲ讀ムニ、曰ク今日
日本ノ天地ニ瀰漫シ甚タ強大急劇ノ速力ヲ以テ、一般ニ
流行スル各種ノ改革變化ハ、學者社會ノ一大問題ニシテ、
或ル論者ハ之ヲ悦ビ、此等ノ變革ハ都テ日本人將來ノ幸
福繁榮ト賛成スルアリ、或ル學者ハ之ニ反シテ曰ク、否否、
此變革中ニ就キ、或ル事項ノ如キハ、啻ニ必要便益ナキノ
ミカ、國家人民眞成ノ幸福ヲ害スル者ナリトテ、駁論スル

モアリ、項ヲ別テ二トナシ、其一ハ實質的ノ變化、即チ鐵道ノ築造、電線ノ架設、汽船ノ構造等、其二ハ社會上ノ變化、即チ一國ノ風俗、一家ノ慣習、衣服飲食居住等、此ノ編ニ於テハ第二項ノ變革ニ付テ論議セント欲スルナリ、東洋諸國カ國ヲ開テ、西洋各國ト貿易ヲ始メシ以來、其事物ニテ歐米人ヲ益セシ者、素ヨリ尠ナカラズト雖モ、就中日本支那ニ成立現存スル所ノ家族ノ仕組ハ、社會學ヲ講究スル學者ニ、甚タ大ナル利益ヲ與ヘタリ、通常ノ外國人ニテモ、久シク日本ニ滞在シテ、其事情ニ能ク親炙セル者ハ、日本家族ノ仕組ヲ見テ、歐米家族ノ仕組ヨリ遙カニ立勝リタル

處アルニ心附クホドナルニ、其主人タル日本人ガ、歐米各國ノ風俗習慣ニ心醉シテ、善惡ヲ識別スルノ明ヲ失テヒ、自國固有ノモノトアソハ、何ニマレ破壊放棄シ去ルノ狂態ハ、恰モ數年前日本美術ノ深奥靈妙ナルトユロヲ畫キ出セル、眞ニ貴重スベキ書畫類ヲ無用ノ故紙トシテ、屑屑ニ賣却シタルノ奇談ト同一轍ナリ、西洋ノ識者ハ窺カニ之ヲ冷笑セザルモノナシ、今日日本人カ外國ノ風俗習慣ヲ模倣シテ、一箇ノ新文明國ヲ組織スル際ニモ能ク注意シテ、家族ノ仕組ハ成丈ケ保存シテ、決テ破壊スベカラズ、日本ノ紳士ニハ、其令嬢ヲシテ早ク歐米ノ風俗習慣ヲ學

ハシメ、洋食ヲ喫シ、洋服ヲ装ヒ、洋琴ヲ彈シ、洋舞ヲ學ヒ、時
ニ或ハ踏舞會場電燈燦爛瓶花鮮妍ノ其中ニ得得トシテ、
僅ニ其面ヲ知り未タ其名ヲ聞カザル程淺キ交リノ美紳
士ト、兩兩纖手ヲ交ヘテ、蹠々蝴蝶ノ舞ヲ爲シ、舞罷ンテ相
對シテ洋椅ニ憑リ笑語喃喃、純然タル西洋貴嬢ノ爲ニ習
ハシメント心ヲ煩ハス人アリト聞ク、余ハ此等ノ人ニ問
ハントス、此風習ヲ習ハシメタル結果ハ、果シテ如何ナル
舉作ヲ養成スルヤ、從前ヨリハ一層兩親ニ對シテ恭順ナ
ルヤ、一層自家ノ生活ニ満足ヲ感スルヤ、母ヲ助ケテ家事
ニ執掌シ、弟妹ヲ愛撫シテ之ヲ教導スルノ狀ハ、從前ニ倍

シテ神妙ナルヤ、世ノ流行ヲ逐テ奢侈ニ奔ルノ弊ナク、能
ク自身ノ物數寄ヲ節シテ、經濟ノ美德ヲ養成スルノ實績
アルヤ、後年其母ニ優リテ、良妻善母タルノ見込アルヤ、余
ハ實ニ氣ノ毒ナガラ、否ト云ハザルヲ得ザルナリ、左レバ
余ハ日本人ニ向テ、連呼シテ忠告セントス、注意セヨ、注意
セヨ、注意シテ決シテ日本特有ノ家族ノ仕組ヲ壞破シ、殊
ニ婦人ノ教育ニ關スル古習舊慣ヲ放棄スルナカレ云云
ト、余之ヲ一讀シテ、初ニハ其言ノ深切ニシテ、我邦人ヲ愛
スルノ厚キニ感シ、漸クニシテ自ラ耻テ又自ラ悲シミ憤
リニ堪ヘズ涕泣スル者少頃セリ、知ラズ此論ヲ讀テ感ス

ル者幾人ソ、自ラ耻ル者幾人ソ、自ラ悲ミ憤フル者幾人ソ
ヤ、

嗚呼此問題ヤ、實ニ學士ノ力ヲ盡スベキ一重事ナリ、夫レ
其家族ト稱スルハ、則チ彝倫ヲ謂フナリ、其美ナル實ニ萬
世不易ノ大典ニシテ、之ヲ守レハ家盛ンニ、之ヲ棄レハ必
ス亡フ、然ルニ吾道ヨリ重クセント欲スル者ハ、五倫ハ未
ダ全ダカラズト云ヒ、又輕クセント欲スル者ハ、君父ヲ尊
フハ壓制ニ甘ンシ伏スルナリ、夫婦モ權ヲ中分スベシト、
重クスル者ハ智ニ似タリ、輕クスル者ハ敏ニ似タリ、遂ニ
自ラ其力ヲ量ラズシテ、妄リニ輕重ヲナシ、或ハ云フ吾レ

宜シキヲ得タリ吾レ中ヲ執ルト、其外邦人ノ嘲ヲ招カザ
ル殆ント希ナリ、

識ナル者實ニ難シ、其取ル可キト舍ベキトヲ明カニスル
頗ル難シ、魚ト熊ノ掌トヲ並ベテ問ヘバ、魚ヲ舍テ、熊ノ
掌ヲ取ラント云フ、利ト義トヲ並ベテ問ヘバ、義ヲ取テ利
ヲ舍テント云フ、然ルニ其行事ノ上ヲ察スレバ、利ヲ取テ
義ヲ舍ルノ人多シ、况ンヤ近來ハ義ハ守ルニ及ハズト唱
フル者アリ、人世ハ實利ヲ主トスル而已ト唱フル者アリ、
奢侈ハ富ヲ致スノ本ナリト唱フル者アリ、然レハ必利ヲ
取テ義ヲ舍テント云フニ至ラン、今ヤ改革ノ說盛ンニ、變動

ノ運ニ當レリ、然ルニ新ヲ媿ヒ故ヲ厭ヒ奇ヲ貴ブノ情ヲ以テ、其心ノ規矩ニ任セテ事ヲ制セバ、何ソ其極リヲ知ルヲ得ン、言語、衣服、飲食ノ習慣ニ從テヨシト云ヒ簡便ノ利ヲ得タリト云フテ、外邦人ハ之ヲ美トシテ保存スベシト曰フスラ、却テ其便ヲ忘レ、故サラニ舌ニ便ナラザルノ音ニ倣ヒ、身ニ適セザルノ服ヲ忍ンデ、咲テ外邦人ニ取ルハ、實ニ無識ノ甚シキナルニ、彝倫ノ美ヲモ廢シ、德義ノ重ヲモ忘レバ、其耻辱何如ゾヤ、余モ亦ドクトルシモンズニ倣フテ曰ントス、注意セヨ、注意セヨ、注意シテ悲憤奮激ノ心ヲ失フ勿レ、頽俗ヲ救フノ心ヲ失フ勿レ、取舍ノ方ヲ誤ル

勿レ、聖典ノ良規矩ニ乖ク勿レ、

情ト義ト相和シテ、其ノ宜シキヲ得テ、禮以テ成リ、法以テ立タバ、治國ノ能事畢ラシ、若シ能ク其家ノ儀式ヲ正シクシ、禮節ヲ整ヘ、以テ一家ヲ齊ノヘバ、齊家ノ能事畢ラシ、而シテ夫婦ノ道ヲ尽クシ、親愛ノ情ヲ全フセバ、子孫モ皆禮ヲ以テ父母ニ事ヘ、老テ後ニ子孫ノ廢棄スル所トナリ、窮愁困苦スルノ患ヲ免レシ、余ト志ヲ同シクスル者、深ク此ニ注意セン事ヲ願フ而已

忘ル、勿レ助ケ長スル勿レ

阿吉見虎陵 名經繪字 號卿會員

人ハ兎角ニ嗜好スル所ニ癖シ易キ者ニテ、上戸ハ酒ハ百

藥ノ長又ハ憂ヲ掃フ玉帚ナド、ダゞヘメヅルモ、下戸ハ
之ヲ狂水トテ、イミシク擯クルヲ常トス、是レ両ツナガラ
中道ヲ得タルモノトハ云ヒ難シ、世ノ中ノ事ハ、何レモユ
ノダグヒヲ免レヌコソウダテケレ、今ノ賢士學者ト世ニ
モテハヤサル、人トテモ、徒ニ心ヲ歐米ニノミ馳セ、舊來
固有ノ美ヲモ棄テ、顧ミザルハ、之ヲ上戸ニ比、ブベク、又
舊習ニ拘泥シテ、彼ノ長ヲ取ルノ識見ニ乏シキ輩ハ、之ヲ
下戸ニ比、ブベキカ、吾ハ中道ヲ以テ身ヲ處スルノ心得ヲ
レバ、孟子ノ所謂忘ル、勿レ助ケ長ズル勿レノ語ヲ服膺
シ、學問スルニモ、交際スルニモ、教育スルニモ、舊來ノ美俗

良風定理確論ハ、決シテ忘ル、勿ク、又泰西ノ奇說妙案ヲ
聞見セシトテ、其長ハセトヨリ取り用フルモ、カノ世話ニ
牛ノ一サント謂フガ如ク、穢嫌ニ任セ調子ニ乘リテ、ホキ
ホキノマニマニ擇バズシテ勇往スルハ、平生ニツ、シミ
ノ上ニモツ、シミ助ケ長ズルノ弊ニ陷ラヌ、襟注意スル
モ、水到レハ渠成ルノ喻ニモレズ、ヤトモスルト自分ノ心
ニ畫セル矩ヲ踰ユルコソ我ナガラニ甲斐ナケレ、朝鮮ノ
李晦齋ガ說ニ、ダトヘバ鷄卵ノ手ニ在ルガ如シ、勿忘ハ手
ニ取事ヲ忘レヌナリ、忘ルレバ取落スベシ、勿助長ハ力ヲ
イレテ握リ固メヌナリ、握リ固ムレバ握リ潰スベシト、此

タトヒハ頗ル肯綮ニ中リ吾人ノ心ヲツケベキ言ナリ、
今日世ノ中ハ助ケ長ズルト忘ル、トノ二ツナガラ流行
スル様見ユルモ是非ナケレ、一家ヲ齊フル事親族ヲ睦フ
スル事等ハ、故俗舊風ニ得モイワレヌ良キ處アリシモ、一
概ニ舊弊固陋ナリトテ擯ケ去リ新俗新風ニ隨分奇妙奇
的烈ノ習ハシアルモ、恬トシテ恠シマズ新風ノ利ヲ見ザ
ル中ニ早ヤ新弊ニ陷ラントスルノ頃チアラハスハ、ツマ
リ忘ル、勿レ助ケ長スル勿レノ故訓ヲ遺忘スルニ由ル
ニナン、後進ノ人ハヨクヨク此語ニ心ヲ留ソコトユソ願
ハシケレ、

善行襍話

渥美某ノ妻永井氏ハ心ザマ貞順ニシテ、ツ、シミフカク
言辭スクナク、父ハ一城ノ主ナリシカバ、幼少ヨリ富貴ノ
事ニナレタリ、其夫ハ祿ウスクシテ、万事匱乏ナルニ氏ハ
此ニタヘテ聊モクルシゲナル色ナシ、然モ夫妻ノ禮ウヤ
ウヤシキ事スグレタリ、十年ヲ經テ、其夫病ニカ、リテ死
セリ、一兒アリ、氏大ニ悲ミ憂ヘテ、祭祀オユダラズ、心ヲ尽
シテ兒ヲ育ス、然ルニ氏ノ兄、其年ワカクシテ、寡婦トナル
ヲ憫レ、ミ強テ志ヲ奪フテ、他ニ嫁セシメントス、氏之ニ從
ハズ、兄怒テ之ヲ強ユ、且一族共ニ相謀リテ、事スデニ逼レ

リ氏ヒソカニ其房ニ入り自殺セントシテ己ニ刀ニテツ
キタルヲ侍婢走リカ、リテ奪ヒ取り之ヲ諫メタリ兄モ
此ニ愕キテ再ヒ縁談ハ云ハズトナカヒケレバ氏大ニ喜
ヒテ曰フ此ノ如キナレバ何ソ幼兒ヲ弄テ、死ヲ早クス
ルニ忍ヒンヤト是ヨリ其子ヲ房中ニ養育シ之ヲ教ヘテ
成人ニ至レリ氏ハ本ヨリ出テ遊ブヲ好マズ特ニ寡婦ト
ナリテ後ハ其夫ノ墓ニ謁スルヨリ外ハ嘗テ門ヲ出ルナ
シ貞節ヲ守レル事大抵此ノ類ニテ推シ知ルベシ年四十
ニミダズシテ死セリ其子母ノ教訓ヲ得ルニ由テ身ヲ立
テ、人ノ知ル所トナレリ時ノ人皆ナ此寡婦ヲ貞婦ナリ

ト感嗟セリ

晋ノ曰季ナル者使トシテ出デ、冀野ヲ過キ冀缺カ壽芸
セルニ其妻之ニ饁ヲ贈リ來リテ相待スルト賓客ノ如ク
スルヲ見テ之ヲ問ヘハ冀芮カ子ナリ乃チ與ニ携テ歸リ
既ニ使ノ事ヲ復命シテ又進メテ曰フ臣ハ此賢人ヲ得タ
リ故ニ以テ告ルナリト文公曰ク子ハ何ヲ以テ其賢ヲ知
レルヤ對テ曰ク其ノ敬ヲ忘レザルヲ見タルナリ夫レ敬
ハ德ノ恪ナリ德ニ恪ニシテ以テ事ニ臨メバ其レ何ソ濟
ラザラント公延テ之ヲ見テ擧テ下軍大夫ト爲セリ
後漢ノ陳寔ハ樊英ニ從テ學ヘリ英一日疾アリ其妻下婢

ヲ遣テ之ヲ問フ英臥牀ヲ下リテ答拜ス寔怪ミテ之ヲ問
ヘハ英曰フ妻ハ齊ナリ共ニ祭祀ヲ奉スル者禮ニ於テ答
拜ス可シト其恭謹ナル梁伯鸞ノ事ト並ベ傳フ伯鸞モ後
漢ノ代ノ人名ハ鴻ト云フ妻孟光ト臯伯通カ庶下ニ居レ
リ人ノタメニ賃春シテ糊口セリ歸ル毎ニ孟光食ヲ具ヘ
テ鴻ニ薦ルニ敢テ仰キ視ルヲナシ案ヲ擧ゲテ眉ト齊シ
クシテ之ヲ進ム伯通之ヲ見テ大ニ異ナリトシテ曰ク能
其妻ヲシテ敬スルヲ此ノ如クセシムルハ常人ニ非ルナ
リト

宋ノ朱熹ハ一時ノ大儒ナリ中夜ニシテ寢シ既ニシテ寤

レハ衾ヲ推シテ正坐シ或ハ以テ旦ニ達ス威儀容止ノ間
少ヨリ老ニ至ルマテ祁寒盛暑又ハ造次顛沛ノ時モ未ダ
嘗テ須臾モ禮ニ離ル、トアラズ郷人ト交ハルニ微賤ノ
人ト雖モ必ス恭敬ヲ致ス故ニ時人皆仰テ泰山北斗ノ如
クス嗚呼恭敬ハ男子一人ニテモ以テ身ヲ立ルナリ况ン
ヤ婦人ヲヤ夫妻ノ際ヲヤ世人宜シク古人ノ迹ニ鑒ミル
ベシ

詩文雜評

問病

栗山 潛鋒 愿字伯立

才多病。往大醫院請治病。以病字起字眼、醫出察色診脈、徐々

日子病何居設問語予曰風寒暑濕之所感臟腑支體

之所疾庸醫治針藥驗皆病之小而小者也摭出身體之疾目以

小之小者奇曰然則子所病者何也曰今之世凡為人之上

者病于傲病于奢病于痴痴字太妙不通細民之情為

人之下者病于媚病于屈病于黠剛者病于刻柔者病

于弛民俗病于澆薄士風病于委靡法則病苛吏則病

汚二句變法愚者病于疑智者病于察經病于註疏禮病于

繁文佛為性病又變句法老為道病記誦詞章為學之病病

利病勢又變句法病偽病奸病窮病廢病淫病貪何往不行

尸又何往不走肉行尸尸之步者走肉肉之走者皆謂無智之徒又何往不惑

攻蠹蝕蠹音匿虫食病皆病之大而大者也醫上文先生為醫

之醫乃擲匕而謝曰參著有所不及參人參著黃針灸

有所不效若子所願則越人回車越人扁鵲也華佗却走矣

噫有所治耶將無所治耶結局

此篇ハ屈原ノ卜居ヨリ化シ來ル先ツ尋常ノ病ヲ小ノ

小ナル者トシテ取リノケ醫師ノ然レハ子ノ病ハイカ

様ナル病ヤト問ノ語ヨリ轉シテ天下ノ諸病ヲ擧ケ盡

クシ是ヲ大ノ大ナル者トス醫師ガ參著ノ名藥ヤ針ヤ

灸ニテモ及ハズ古ノ名醫扁鵲ヤ華佗モ逃テ手ヲ下ス

能ハズト云テ噫ノ字ニテ一束シ治ム可ト治ムベカラ

ザルトヲ判定セザル處大ニ妙ナリ、全篇數十ノ病ノ字活動セリ、此病ヤ千古同一轍、人々願ハ自ラ之ヲ療スルノ方ヲ求ム、

將棋說

藤堂詢堯齋

名高猷

凡天下之事、不知活用之理而欲妄窮其闔奧、所志雖大、不自畫者、幾希、苟知活用之理而施之於物、所志雖小、亦足以立萬世之長策矣、冒頭一段、粗見大意、活用二字、主眼、蓋將棋之爲技、本屬遊戲、然至於運籌胸中、決勝局上、可以通軍事矣、自有抑揚故此技也、自有紀律、局面八十一格、棋子四十、兩分之、其大將軍者爲玉、而以金將銀將爲之親

兵、飛車角行爲前驅、步卒則如魚鱗、羅列其前、旣一戰而挫敵、有窮迫降者、收以供我用、其攻城斫營立功績者、進爵一級、不許步卒二人同格而進、所謂若誤犯其禁、黜斥以懲之、号令嚴肅、秋毫無所私、以上先叙局制與戰方大概、語方其交鋒也、選要害之地、排陣張營、或密或疏、不々精一而足、陣法、轉入陳法有數名、曰石田、曰櫓、曰蓑、石田則視備未定、佯爲攻右而出左、使彼疲、奔命而倉猝擊之也、櫓則固壁而守焉、不欲戰也、蓑則張左右翼、蹙之飛車角行、戮力長驅入敵地也、文法齊整、苟由此方法、則雖不得必勝之利、亦無瓦解土崩之虞也、東一彼若恃勇力以

飛車爲軍帥、以銀將爲副、欲逞羸輪于一舉、踊躍馳突、其鋒不可當、則立柵自固、愈攻愈守、以示不戰、彼必侮我、怯懦、英氣浸弛、我乃乘機分兵二隊、一則橫衝破之、一則從間道而入、薄城急攻、揮刀亂斫、城兵出其不意、睜眦莫敢支吾焉、於是龍王把鞭一麾、百弩俱發、彼金銀二將、以身當之、擁護玉將、所謂時出奇兵襲其背、後、玉將遂窘迫失度、脫胄而請降矣、說雖然彼亦有應之之策、使我拙於彼、則勝敗利鈍不可前知、要在於自得之而已耳、自得二字、與前後活用字、相映發、嗚呼、以區々之技、而其開闔變化如是、况於用兵乎、策且將棋奴隸之遊戲

也、兵法則將帥之要務、然而要務動爲空論、而遊戲或具活理、由其用心與不用心故也、錯綜要務與遊化、玩器爲有用、變空論收實效、活用之爲理、不亦大耶、括活用字、以、余於此技有所發悟焉、作將棋說

公ハ將門ノ鏘々ナル者ナリ、其兵ヲ用ルニ窳ナルヤ、故ニ將棋ヲ論スルモ、亦此ノ如ク至レリ、且文章ヲ嗜ム、頗ル篤ク、文藝専門ノ士ヨリ勝レリ、故ニ九九盤上ノ動作ヲ寫シ出ス細密ナリ、讀者玩味スベシ、然シテ其主旨ハ活用ノ二字ニアリ、彼ノ岳飛カ語ニ、運用ノ妙ハ一心ニ存スト云ヘルモ、皆心ニ自得スル所アリテ、以テ活用

スルナリ、治國齊家ノ方モ、身ヲ立ツルノ方モ、悉ク活用
ノ二字ニ止マルナリ、玩味シテ知ルベシ、

虞姬

朱 靜 菴

力盡重瞳、霸氣消、楚歌聲裡恨迢々、貞魂化作原頭草、
不逐東風入漢郊、

項羽ノ妾虞美人ノ心事ヲ説キ尽セリ、重瞳ハ羽ナリ、四
面楚歌ノ聲中ニ在テ、帳中ニ飲宴歌舞シ、遂ニ節ヲ守リ
テ死セリ、婦女ノ節ハ此ノ如クナルベキヲ見ル、

明妃曲

李 滄 溟

攀龍

天山雪後北風寒、抱得琵琶馬上彈、曲罷不知青海月、

徘徊猶作漢宮看、

漢ノ王昭君北胡ニ嫁ス、其情ノ憐ムベキ一樣ナラズ、故
ニ古人多ク之ヲ詠ス、此詩ハ其北地ニ在ルヲ忘レ、漢宮
ニ在ルノ想アルナラント、想像ナリ、痴想ナリ、却テ味ノ
深ヲ覺フ、婦人ノ情ヲ知ル爲ニ登記ス、

雜詠

外村 三行

字有師

相敬如賓客、相配如儔輩、蝶狎與戲謔、夫婦之醜態、
敬アリテ始テ永ク配スルヲ保スルヲ得ルナリ、醜態ヲ
了知シテ、自ラ慎メハ、必ス其婦徳ヲ有スルヲ得ン、
惑哉衆婦人、飾容不飾心、其容則豔麗、其心則荒淫、

第二句ノ五字婦人頂門ノ一針ナリ心ヲ飾ルノ方ヲ求
ント欲シテ驕敖ノ心ヲ生シ、男子ニ抗スルハ吾カ所謂
心ヲ飾ルニ非ルナリ、

聞道則做人、不聞則是獸人、而不做人、枉却百年壽、
人面獸心ハ、人々ノ耻ナリ且惡ム所ナリ、然ルニ道ヲ學ハ
ズシテ、遂ニ自ラ惡ムノ地ニ陷ルハ、不知ノ甚シキナリ、
体ハ人ニシテ、人タルノ實ナク、年ハ百歳ヲ保シテ、百歳
ノ益ナシ、空ク生テ空ク死スル者、滔々トメ天下ニ滿テ
リ、是レ聖人ノ教ニ汲々トシテ之ヲ教フ所以ナリ、

明治二十年九月一日御届
同 十月十五日版成

東區淡路町一丁目十六番地

愛媛縣士族

著述出版人

藤 澤 南 岳

